〔紹　介〕

小野美典著『幕末維新期の近藤芳樹―和歌活動とその周辺』

尾　崎　千　佳

本書は、幕末・維新期の国学者近藤芳樹を研究の対象として、芳樹編著書に即しつつ、その多面的な活動の内実に迫った論文・資料集である。

享和元年（一八〇一）、周防国吉敷郡岩淵村の農家に生まれた芳樹は、同郡台道村の大庄屋上田堂山の支援を得て上方に遊学し、村田春門・本居大平・山田以文等に師事して和歌・国学をはじめとする諸学の修得に励んだ。天保十一年（一八四〇）、年来の苦学研鑽を認められて萩に召還された芳樹は、藩士近藤家の跡職を嗣ぎ、藩主毛利敬親に国学を教授し、藩校明倫館の講師をつとめるかたわら、萩江向の地に私塾を営みもした。維新後の明治八年（一八七五）には宮内省歌道御用掛を拝命、明治天皇の巡幸に随行して従駕記を著すなど活躍したが、同十三年（一八八〇）、八十年の生涯を閉じた。

近世から近代への移行期を生き、萩藩の政治と文学に貢献した芳樹の研究は、従来、伝記・交友・学問・思想など、さまざまな視点で行われてきたが、本書は芳樹を主対象とする初めての論文集として注目される。芳樹の行動や言説に注目する傾向のあったこれまでの研究に対し、同時代人の歌集の編纂や出版に積極的に携わった点を「芳樹の文学活動の枢要」（「序にかえて」）として評価する点に、本書の特色がある。全四部構成、第一部から第三部は論考編、第四部は資料編として芳樹関係資料九篇の解説と翻刻を収める。ここでは論考篇の概要を紹介したい。

第一部「近藤芳樹の編集した類題和歌集の考察」では、芳樹の編集した類題和歌集のうち、佚書『類題雪間の若菜』が安政三年（一八五六）刊『類題風月集』と同一書であることを指摘したうえで、文政十三年（一八三〇）刊『類題阿武の杣板』と明治七年（一八七四）刊『類題和歌月波集』について基礎的考察を展開する。前者では、芳樹の庇護者上田堂山関係者が多く入集するという事実に着目し、後者では、国事殉難志士への哀悼を読み取るなど、編集の意図や背景にも言及する。

第二部「近藤芳樹の作品の考察」では、芳樹の著作『たのむのかり』『近藤芳樹自筆歌集』『牛乳考』をとりあげ、各書の諸本・書誌・内容・成立を詳説する。語学書『たのむのかり』をめぐる考察では、諸本の精査から版本成立の過程を論じつつ、芳樹伝に修正を加

える。山口県立山口博物館蔵『近藤芳樹自筆歌集』は新出資料。明治七年十二月、山口滞在中の木戸孝允に献呈されたと推定する。本邦における牛乳飲用の起源やその効用を説く『牛乳考』は、明治五年（一八七二）刊。先行する著述から牛乳に関わる言説を参照しつつ、『牛乳考』の成立過程を論じる。

第三部「近藤芳樹が編集・出版・成立に関与した作品の考察」では、吉田松陰歌集『涙松集』、萩藩家老福原元僩歌集『緑浜詠草』、萩藩士宍戸真澂歌集『間荒加多満』、徳山藩主毛利広鎮歌集『類題玉函集』、芳樹編『明治孝節録』の五書を分析する。いずれも芳樹研究としては顧みられることの少なかった作品であるが、丹念な書誌調査や関連資料の解読を通して、歌集編纂が防長両国の人々の事績を顕彰するうえで不可欠な営みであったことが浮かびあがる。政局や戦局ゆえに慚死を遂げた志士の遺族や遺弟にとっては、死者の辱を雪ぎ、その人生を伝世するために、歌集はとりわけ重い意味を帯びたであろう。

「跋にかえて」によれば、本書は、著者が日本大学法学部に着任後の十二年間に発表された論考を基礎とするという。同大学の紀要・学会誌を初出誌とする論考が多いが、『山口国文』に発表された論考一篇・翻刻二篇も含まれており、基礎研究を地道に積み重ねることの重要性をわれわれに教えてくれる。各論一貫して、冒頭に《要旨》が掲出され、「おわりに」でみずから考察をまとめる点にも、著者の誠実な研究姿勢がうかがわれ、心洗われる思いがする。

（『幕末維新期の近藤芳樹―和歌活動とその周辺』新典社研究叢書三三七　二〇二一年五月刊　五八二頁　一八七〇〇円）

（おざき・ちか）